



- 学ぶ意欲の減退・喪失 学ぶことの意味の希薄化、 学力の低下（格差）

【PISA2003より】

- ・ 通常の授業以外の宿題や自分の勉強をする時間について、わが国の生徒は週当たり平均6.5時間で、OECD平均の8.9時間より短い。また、数学の宿題や自分の勉強をする時間については、わが国の生徒は週当たり平均2.4時間で、OECD平均の3.1時間より短い。
- ・ 数学的リテラシーの分散（ばらつきの程度）と学校間分散割合について、わが国は、生徒全体の数学的リテラシーの格差が大きく、学校間の格差も大きい。一方、フィンランドは生徒全体の数学的リテラシーが高い得点範囲に集中して分布しており、学校間格差はあまり見られない。

- "受験"のインセンティブ

受験（あるいは資格）のインセンティブ ← 得る物が多い 失う物が多い  
競争 激化→参入減少→二極化→  
→（次にくるのは） 離れる自由 は 不自由  
→ 対立・社会不安

- 成長モデルの終焉

早く出発する電車に乗ると、かなり遠くまで到達できる。  
1本でも早い電車に乗ろうと、殺到する。  
早い電車に乗れなくても、それなりに遠くまで行けた。  
↓  
早い電車ほど遠くまでいけることには変わらない。  
ただし、駅を出たとたんに、電車は渋滞。  
早く乗っても、遅く乗っても、それほど変わらない。  
いずれにせよ、それほど遠くまで行けるわけでもない。

- ★ 生きにくい現代を生活している子どもや若者

先行きが不透明であり、それによってもたらされる将来への漠然とした不安が支配する。こうした重苦しい雰囲気の中で、本音での人との関わりをさげ、居場所をさがしてさまよう姿。かといって絶望的な状況にあるわけではなく、幸い(?) 切迫した生活上の課題（端的に言えば、明日の衣食の心配）もなく、必死になって今日を生き抜こうという活気もみられない。

- フリーターやニート、早期離職率の増加など、働くことを通じた社会参加の様相に大きな変容

→ 職業教育、進路指導 → キャリア教育 → 生き方の教育へ

キャリア教育が求められる背景 協力者会議

- ①経済のグローバル化の進展、コスト削減、経営の合理化、雇用形態等の変化、求人の著しい減少、求職と求人の不適合の拡大。
- ②若者の勤労観、職業観の未熟さ、職業人としての基礎的資質・能力の低下等。
- ③精神的・社会的自立の遅れ、人間関係を築くことができない、進路を選ぼうとしないなど、子どもたちの成長・発達上の課題。
- ④高学歴社会におけるモラトリアム傾向。進学も就職もしようとしなかったり、進路意識や目的意識が希薄なまま「とりあえず」進学したりする若者の増加。

- 様々な課題はあるが。。。

- ・ 学校ならではの学びの意味を問い直す契機
- ・ 学ぶこと自体の価値に基づく学びを構築する機会
- ・ 多様な生き方の選択肢があり、いつでも、どこからでも、チャレンジできる社会へ



